会員の広場	2022年9月１日発行メールマガジン第２６号

耳をすませば・・

私は耳はいい方だと思う。

この夏の朝、夜が明ける前に聞こえるのはメジロのチュルチュルという声。14 階の我が家に響いてくるが、これが不思議。夜が明けるとその声が止む・・、どうしてだろうか、ご存じの方がいたら教えていただきたい。横の水路の干満と、ボラの大きさで、カワセミがツィーと鳴いて一直線に飛び去る様子も声でわかる。横の水路、この時間は潮が満ちてきたのだろうかと。この時間、まだ私は寝床にいる。

夏になると、どのセミがいつ頃初鳴きをするか？　近くに杉林のない我が家では、ニイニイゼミが最初に鳴く。何年か前まではニイニイの声が少なくなったように思えていたが、この頃は雨が多いせいか、どこでもニイニイはよく鳴くようになった気がする。でも、都心ではどうだろうか？　どこでもいるというわけではないクマゼミも７月初旬くらいに鳴き始める。今年、ニイニイは園生の森で６月 25 日、ミンミンは 14 日、クマゼミは 17 日に我が家で初めて聞いている。最近は、アブラゼミの声の方がミンミンより遅いようだ。ツクツクボウシは、しばらく前には８月初めに鳴き始めたようだが、この頃はだいたい７月末には鳴き始めるようになった。今年も７月下旬に四街道で聞いたのが最初。うちの近くでクマゼミの声を聞くようになったのは、どうも新しく植栽が植えられてからのように思える。毎年、鳴いているあたりではクマゼミの声がするが、そこから遠のくと声がしなくなるように思えるので、セミの行動範囲は意外と狭いのでは・・と思っているが、これも教えていただきたいことのひとつ。

たまたま近くで落ちていたクマゼミ

４月の蒸し暑い夜には、ジィーッとクビキリギスの声。これはあまりうれしくない。でも、ちょっとした水辺でキンヒバリが鳴き始めると・・６月くらい、リリリリリィーという何ともいい声・・今年も鳴き始めた、待ってました！と言いたくなる。

８月も半ばを過ぎると、昼は草むらで、ルルルルルルーというクサヒバリの声がして、夜は中国から来たというアオマツムシのリーリーという声がしてくる。戦前に日本に入ったらしいが、戦後いなくなっていたのが、この虫はちょっとした虫のニッチであった木、低木を住みかとするので、道路沿いに植栽で繁殖して数を増やしたらしい。在来の虫の声を観賞しようとしても、大きなリーリーという声に邪魔されるので、木の生えていない場所を探さないとコオロギなどの声がよく聞き取れない。それでなくとも、いい声で鳴くエンマコオロギなど少なくなっているのに・・と。私はフィリリリリーと鳴くエンマさんが好きだ。ところが以前、野外でエンマコオロギが、ホント、集団で鳴いているのを聞いて、うるさい！と思ったことがあった。いい声でも、大集団で鳴かれると、ちょっと耳に耐えがたいのだった。その時、思ったことがある。昔は、コオロギでなくカンタンの声がいいとされたのは、昔は夜というのは今のように騒音だらけでなく静かに眠る時間だったからで、耳を澄まさなければ聞き取れないくらいの低音の魅力、ルルルルルルル・・をいい音色だと感じたのは当然だろうと。カンタンはクズの裏にいることが多く、毎年近くの電車沿いの小道に、虫よけスプレーをしてから、そのルルルルル・・と求めに出ていく。今年も鳴いてくれるといいぁと願っている。

ある程度の草むらがあると、６月くらいからキリギリスが、チョン、ギースと鳴く。この頃は園生の森のそばの団地の草むらで聞くようになったが、このヒガシキリギリス、以前はあまり聞く機会がなかった。低山などに行かないとなかなか聞くことができないでいたので、今は「毎年さん」になっていて嬉しい。

そういえば、笑いごとになるが、鳴く虫で思い出すのは、もうほとんど見ることがなくなってしまった。クツワムシ。人からいただいて飼うことにしたが、これが夜の８時くらいになると、シャカシャカシャカと始まって、だんだん大きな声で、ガチャガチャガチャ！と、とんでもなく大きな声で鳴きだすのだ。うるさくて、テレビの声も聞こえない。かといって、ベランダに出したら、お隣に迷惑。そのうちに、早く涼しくなってくれないかと、祈るような気持ちになった。そんなことも、今では贅沢で懐かしい思い出だ。

我が家で楽しい自然観察

「小さい庭で一人の観察会」を楽しんでいます。
四季を通じて花が見られる庭を目指していろんな低木を植えています。
無理に低木に仕立てられている気の毒な木もありますが。
この時期にトキワマンサク、カラタネオガタマ、バイカウツギ（1 輪）が花をつけています。
異常気象が影響しているのでしょうか？
こんな我が家の庭を住処にしたり、訪れてくれる子たちがいます。

ジャコウアゲハ
　８月７日・８日、連続してジャコウアゲハが羽化しました。どちらもメスでした。
元会員のＩさんが関西に転居される時いただき、庭に植えた「ウマノスズクサ」に、ジャコウアゲハが卵を産み付けに訪れます。ヒラヒラと優雅な姿で現れ、「これじゃないな？」「こっちかな？」といろんな葉に移っていきます。家の中から「もうちょっと右、右よ」と声援を送っています。最後にはちゃんとウマノスズクサに辿り着きます。毎回「よく分かるなあ」と感心してしまいます。飛び去った後、数個のタマゴが産み付けられた葉っぱが見つかります。幼虫に食べ尽されたウマノスズクサは 10 日もすると、地面から又小さな葉っぱをのぞかせ、見る見るうちに元気に茎をのばしていきます。

ツマグロヒョウモン
　タチツボスミレに産卵、立派な幼虫に育ちました。「明日写真を撮ろう」と思っているうちに行方不明になってしまいましが。植木鉢の縁で蛹になっていました。胸のボタンがキラキラしていました。

ルリタテハ
　毎年ホトトギスの葉にタマゴを産みにきます。幼虫のトゲは立派ですね。食用旺盛で葉っぱが全滅に近い状態になります。でも花は咲いてくれるので「好きなだけ食べて」と眺めています。

カナヘビ
　去年までは１匹でいる姿しか見ていなかったのですが、今年は２匹でブロック塀の上や陽だまりでのんびりしているのを見かけるようになりました。仲良しです。雄と雌かな。

オオカマキリ
　５月 30 日に生まれた幼体が今では立派な大人になっています。出会うたびに「今日はここですか」「おおきくなったね」と話しかけています。

ヤモリ
　植木鉢を移動したときに遭遇することがあります。「びっくりしたー、寝てたのに。」と迷惑そうな様子でした。

　今年の冬に玄関わきの鉢植え（アブチロン）の枝にモズのハヤニエ（カナヘビ）を見つけました。庭に来るのはスズメ、シジュウカラ、メジロ、ウグイス、キジバト、ヒヨドリだけかなと思っていたのに、モズも来ていたんですね。

　他の訪問者の写真も見てください。

野田市　片岡真智子

カラタネオガタネ	トキワマンサク	ジャコウアゲハ羽化直後
ジャコウアゲハ蛹	ツマグロヒョウモン羽化直後	ツマグロヒョウモン蛹
ルリタテハ羽化直後	オオカマキリ	マエキトビエダシャク
モモスズメ	ベニスズメ	クロメンガタスズメ

青いハチ：ルリモンハナバチ

～ハチの色は黄色と黒だけにあらず～

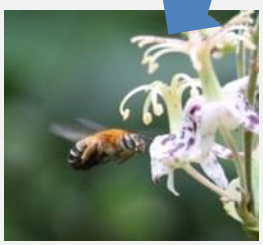
「幸せを運ぶ青いハチ」として有名？になった「ルリモンハナバチ」です。ハチなのに色が青いことが珍しいということでメディアに多く登場していますが、生態など不明なことが多い謎のハチです。

名前：ルリモンハナバチ（ナミルリモンハナバチ）
分類：ミツバチ科
大きさ：雄 10～13㎜、雌 11～14㎜
分布：本州/四国/九州
発生時期：9～10 月
特徴：体表面に青色の毛が斑紋状に生える
生態：スジボソフトハナバチに寄生すると推測される

生態は不明

※インターネット及び図鑑から抜粋

＜スジボソフトハナバチ＞
細いのか太いのか良くわからない、ややこしい名前です。
ヤマホトトギスを訪れていました



このハチを知ったのは、朝の情報番組でした。番組では、幸せを運ぶ青いハチ「ブルービー」と呼んで紹介していました。この時は、特に気にかけませんでした。

2018 年小さな秋を探しに雑木林を散策しているとヤブミョーガの花のまわりをせわしなく飛ぶ鮮やかな青色のハチを見つけました。「ルリモンハナバチだ！」とカメラを構えましたが、ファインダーで捉える前に藪の中へ消えていきました。翌年、ヤマホトトギスの花で再会することができました。（ヤブミョーガの花よりも好んでいるように見えます）

８月下旬になると蚊の猛攻を受けながら花の前でルリモンハナバチが現れるのを待っています。出会う回数を増やして生態を自分の目で確かめたいと思います。

西野孝法（千葉市）

My field では、
８月下旬から見ることができます

ヤマホトトギスにペアで現れました

背中側から見ると青い色がよくわかります

「異色（鮮やかな色）」のハチたち

オオセイボウ

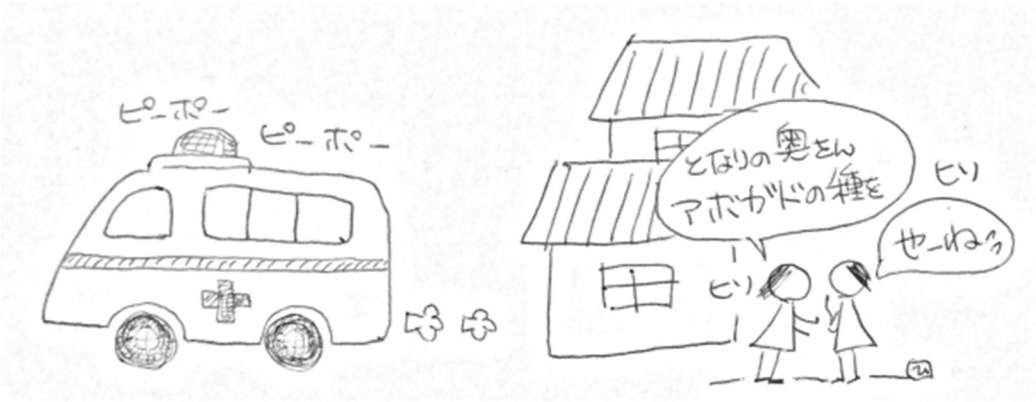
アオハバチの仲間

ハラアカヤドリハキリバチ

アボカドの誘惑

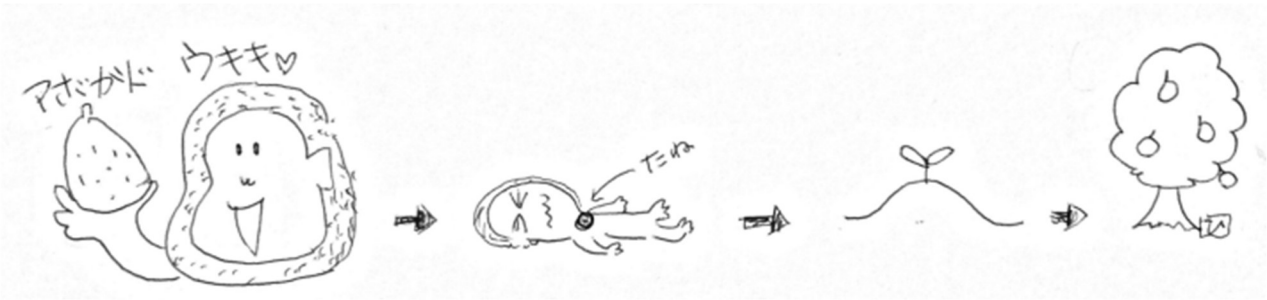
小坂　裕子

アボカドが好きでよく調理します。実を半分に切ると　まん丸の種が現れますが、その種に果肉が残ることがあります。もったない病の私は、種に残った果肉が惜しくて、スプーンでこそげ取るのですが、ヌルヌルした球形の種は滑りやすく　あと一歩というところで種を流しに落とし、泣く泣く諦めます。そんな作業を家族も帰宅していない夕方に一人していると、スプーンでやるより、丸ごと種を頬ばり自分の歯で削ったほうが効率も良く無駄がないのではなかろうか、誰も見てないしやってみたい気持ちになりますが、以下のようになりそうで、一度も試したことはありません。



以上のように、アボカドは大昔太古の時代に、サルや人が種を詰まらせて　その身体を栄養に繁栄したに違いない、と、長年そう思いながら　調べたこともなく、今回この原稿を書くにあたり　一応ネットであれこれ検索しましたら、なんと以下のような記述が・・。

“― アボカドの種が巨大化した理由 ―　数万年前、巨大獣との関係で繁栄した。三トンもの大ナマケモノや車並みの大きさのアルマジロが、アボカドを食べ、毒のある種は消化されず便として排出され子孫を残してきた。”



「へー！なるほど、そうだったのか、」と思いながら、次は、アボカド・毒で検索すると、
いくつかの動物病院のホームページで、“アボカドは、犬、猫、鳥、ウサギ、サル、牛、馬等に毒であり、下痢、けいれん、呼吸困難、嘔吐等、量によっては死亡するようである”と恐ろしい記述がありました。人間は無毒化するが、その仕組みはまだわかってないそう。
多くの哺乳類、鳥類に有毒で、人に近いサルが NG なのに、オオナマケモノと人間はなぜＯＫなのでしょう，
オオナマケモノガ食べていた証拠、化石があるのかしら。学者の先生方も実物を観察したわけでもないし、いまひとつ出所がはっきりしませんでしたので、結局　オオナマケモノ説は信用できずにいます。
やはり、アボカドは人間を誘惑するために種に果肉をヌルヌル残し、種の大きさは人間の喉のサイズに落ち着いたのではないか。私が一人台所で考えたこの説をいつか証明してみたい！と思っています。

植物雑感『ススキ』薄・尾花。イネ科ススキ属・Miscanthus sinensis

今年の中秋の名月は9月10日です。（旧暦の8月15日）我が家では近所でススキを取ってきてお団子と一緒にお供えをして、秋らしい雰囲気を感じています。ススキは秋の七草です。秋の七草については、万葉集で詠われた山上憶良の歌から七つの花が決まったとあります。

「秋の野に　咲きたる花を　指折り　かき数ふれば　七種の花」　（巻８-1537番）

「萩の花　尾花葛花　瞿麦の花　女郎花　また藤袴　朝顔の花」　（巻８-1538番）

ハギ、オバナ、クズ、ナデシコ、オミナエシ、フジバカマ、アサガオ（キキョウ）の七種です。

七種が定められた理由について、七という数字は西欧ではラッキーセブンとして縁起のいい数であるが、日本ではむしろ八の方が末広がりということで喜ばれる。どうして七種となったかについては乞巧奠（きっこうでん）に供えられたという説があります。乞巧奠は中国の七夕祭りであり、女子が機織りや手芸が巧みになることを請うた祭りである。七月七日と七種を結び付けたと考えられます。憶良は遣唐使の書記官として中国に渡り、中国の行事や風習に直接触れる機会があったので、七種の花としたことは中国思想の影響があったと思われます。　（湯浅浩史の「植物と行事」より）

〇一番は**ハギ**です。ハギは野山の日なたに生える、草本でなく木本です。草で無いのに七草の仲間に入っているのは、古人は木と思わず草として扱ったとのようで七種の花と綴られてます。万葉集には植物を詠んだ歌が数多くあるが、萩が141首と一番多く、万葉人の萩によせる深い思い入れがあり、秋の花の代表種として取り上げられたものと思われる。

〇次に**尾花（ススキ）**。万葉集では「すすき」「尾花」「かや」などの名で46首あります。ススキはすくすく立つ木から、尾花は花穂が馬の尾に似てる、カヤは刈って屋根の茅葺きにしたなどの説です。私は箱根でススキの群落を見ましたが、春には野焼きをしてる場面にも出会いました。草原がそのままなら樹木が入り遷移が進むから、ススキの草原維持には野焼きか草刈りが必要だそうです。

不思議に思うのは、七草では花を愛でる筈がススキのようなイネ科の穂しかない草が選ばれた事です。これは日本人が風情を大事にして白い穂が風になびくのが魅力で評価になったのでしょうか。月見信仰と合わせ秋の空気が澄んだ夜空の満月にススキの穂が合うのでしょう。

〇**葛花**：つる草、根は葛粉にしたり、葛根湯に用いる。葉の裏が白くうらみ草という。

〇**瞿麦（撫子）**ナデシコは淡紅紫色、5枚の花弁の先は細かく裂ける。美しく花姿が可憐。

〇**女郎花**：オミナエシ。枝の上部で枝分かれした先に小さな黄色い花が多数咲く。

〇**藤袴**：フジバカマ。花の色が藤の花に似て、筒状の花弁が袴のような形に見えるから。

〇**朝顔**：キキョウ。憶良の秋の歌の最後に出てくる朝顔の花は現在のアサガオではない。

小島紀彦（我孫子市）

ハギ

クズ

ナデシコ

オミナエシ

フジバカマ

アサガオ

畑の雑草と付き合う

先月は野菜の花を話題にしましたが、今回は畑の困りもの雑草です。
プロの農家は夏になれば連日雑草との闘いだと言います。私のようなアマチュアは生活が懸かっている訳ではないので、真剣さに欠け雑草には勝てません。引き分けなら上出来と思っています。

雑草と言っても色々ある訳で、今までの自然観察者的な立場で見ていた時の印象と、菜園での印象が違うものがあります。
その一例がツユクサです。
涼し気な青色の花は可憐で浴衣の文様や団扇の図柄にも合います。
露は儚いものの代名詞ですから、その名を冠したツユクサも弱々しい草の印象を持っていました。
ところが雑草として畑に侵入すると退治するのに苦労するやっかいものです。
スイカやカボチャは敷き藁で地面を覆って苗を植え付けておけば手間いらずと思っていると、敷き藁の隙間から芽生えたツユクサが生長しています。
芽生えばかり初期段階なら簡単に引き抜けますが、除草のタイミングを失すると四方八方に広がった茎の節々から根を出すので、草全体が一針一針地面に縫い付けられたような状態になってしまいます。
放置すれば一株で一畳分くらいの面積を楽に覆ってしまうでしょうから、油断できません。
どうにか引き抜いても節の部分で千切れて残ることがあり、見逃すとその部分から再生してしまいます。
抜いたものを熱中症警戒の注意報が出る炎天下に置けばたちまち干上がってしまうと思うのは大間違い。
過酷な条件下でも数日間は生き延びて、その間に雨があれば再び根付いてしまいます。
ツユクサという奴は見かけによらず本当にタフで厄介です。菜園を手掛けて初めて知った一面です。
　引き抜いて炎天下に放置しても簡単に干上がらないのはスベリヒユも同じです。

多肉植物の様な分厚い葉と貯水力のある茎の姿を見れば、乾燥に強いのは容易に想像できます。
但し地上を這っている茎からの発根は無いので、引き抜くのは割と簡単で、ツユクサに比べればまだ扱い易い方です。
山形県では茹でて乾燥保存したものをヒョウといい正月には青豆と白和えにして食べるのが習わしだそうです。更に数の子を加えれば「この一年、豆で数々働いて、ヒョットしたこと（災い）がないように」との願いが込められているのだそうです。別の解釈ではヒョットした事（幸運）がありますようにとの願いもあるようです。（国分市太郎著　いなかのうまいもの　より引用）
この本を読んで私も味見したくなりましたが、材料はふんだんにあっても乾燥品を作るには手間と時間がかかるので、生のものを茹でて食べてみました。ぬめりのある食感と酸味があり、夏向きの一品として乙なものでした。
温暖化による干ばつで夏野菜の栽培が困難になってもスベリヒユなら耐えられると思うので、ヒョットすると将来は雑草から野菜に昇格しているかもしれません。

佐倉市　坂本　文雄